

# 赤ちゃんポストに対する大学生の認識

## The Recognition of the College Students of the Baby Hatches

増田 啓子<sup>1)</sup>・中村 美緒<sup>2)</sup>

MASUDA Keiko・NAKAMURA Mio

1) 常葉大学保育学部 2) 静岡市立新富町子ども園

### I. 研究目的

匿名の実親から新生児を預かる日本最初の設備である、「このとりのゆりかご」（通称赤ちゃんポスト）は、2007年に熊本県の慈恵病院で運営が始められた。児童遺棄を助長させるという批判の中にあっ、このシステムにより毎年少くない命が救われている。運営する慈恵病院では、妊娠・出産などに関する相談を同様に受け付けており、その件数は2016年度上半期で3209件となり、設置以来最多を更新した。相談内容は「妊娠・避妊に関するもの」、「思いがけない妊娠」、「妊娠・出産前後の不安」、「出産・養育」等である<sup>1)</sup>。

赤ちゃんポストは、「子どもを捨てる場所」ではなく、「母子を守る新たな試みの一つ」としての先人の知恵と努力の結果から考え出されたものであり、日本以外の多くの国でも運用されている。我が国では慈恵病院の1件のみが運用されているが、そこには前述の通り妊娠・出産に関する相談が年々増加しており、運用実績が上がりつつも増設の動きもないのが現状である。

「このとりのゆりかご」には多くの年代から相談が寄せられており、20歳代をはじめとする若年層からの相談が、最も多くなっている。ライフスタイルや性意識が変化している中でありながら、若者への性教育や、生命を尊重する教育が立ち遅れているという指摘もあり、社会的課題としてあげられている。福祉の推進や若者への啓発にあたり、赤ちゃんポストに代表される社会的養護の現状について、若者がどのような認識を持っているかを、検証する必要があると考えた。

そのため、本研究では赤ちゃんポストについての学生の意識調査を手がかりに、児童福祉の課題と若者への命に関わる教育の在り方等について検討することを目的とする。

### II. 研究方法

#### 1. 先行研究の分析

諸外国と日本における赤ちゃんポストの経緯を文献により整理する。

#### 2. 大学生を対象としたアンケート調査

赤ちゃんポストに対する若者の基本的な知識と考え方を明らかにするため、大学生を対象とした質問

紙によるアンケート調査を実施する。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 文献調査

##### (1) 諸外国における赤ちゃんポスト

日本の赤ちゃんポスト、「こうのとりのゆりかご」はドイツの Babyklappe を参考にして設立されたと言われている。Babyklappe の原型は、12 世紀末にローマ教皇のインノケンティウス三世によって病院で創設された。当時ローマでは乳児の溺死や遺棄が増大しており、心を痛めた教皇は 600 人の乳児を収容できる施設を設置し、匿名で乳児を預かった。その施設では乳児を寝かせる大きな皿を用意し、その皿を回転させることで乳児を室内へ入れていた。この皿は、後にドイツで生まれる Drehlade (回転式の棺のような箱) へと継承された<sup>2)</sup>。

Babyklappe の思想の根底には、女性救済の論理がある。宗教上、妊娠中絶や未婚女性の妊娠を禁じている場合があり、Babyklappe は新生児の救済だけでなく、追いつめられた女性の救済措置としての意義もあった<sup>3)</sup>。

ドイツ以外にも Babyklappe の設置は広がっており、このシステムはどこも同様に運用されている。いずれも、匿名でありながら、赤ちゃんを預けた母親と子どもの関係を明白にしようとしており、預かった赤ちゃんを、預けた母親に引き渡すことを使命としている。赤ちゃんを正確に実の母親に引き渡せるように、指紋や足紋をとることや、母親に赤ちゃんポストの機能を説明する手紙を置いておくことなど、細かい配慮がなされている。たとえ母親が引き取りにこなくても、結びつきを残しておけるよう情報の提示を母親に求めている。赤ちゃんポストは、児童遺棄を助長させるものだという批判があるが、実際の赤ちゃんポストは希望と肯定感情に満ち溢れている<sup>4)</sup>。

現在赤ちゃんポストを実施する国は、日本を含め、ドイツ、アメリカ、パキスタン、南アフリカ、韓国など 10 数ヶ国存在する<sup>5)</sup>。スイスには、「赤ちゃんポスト」以外に、病院で出産する「匿名出産」、名を明かして極秘で出産する「極秘出産」の 3 つの方法がある。極秘出産では、母親は退院時に自分の個人情報を出産施設に残す。その情報は、子どもが成人するまで厳重に保管され、子どもがその情報を知りたくなった時は教え、子ども自ら母親に連絡できるようになっている。「極秘出産」はスイスでは合法となっているが、一般にはほとんど知られていない<sup>6)</sup>

オーストリアでは 2001 年から赤ちゃんポストの設置が始まった。8 か所 (2007 年現在) ある赤ちゃんポストは全て公立病院に併設されており、運営費は各地方自治体が補助している。2001 年オーストリア連邦政府は、法務省、内務省、社会保障・家族省との合意のもとで、『オーストリアにおける赤ちゃんポストと匿名出産に関する法令』を公布している<sup>7)</sup>。

ドイツ国内には、現在約 100 か所の赤ちゃんポストが設置されており、その多くがキリスト教系の団体によって運営されている。匿名の母子支援を実施する支援団体の中でも、赤ちゃんポストについては賛否が分かれているが、赤ちゃんポストの多くは、今なお設置され続けている<sup>8)</sup>。

##### (2) 日本における赤ちゃんポスト (こうのとりのゆりかご)

熊本県熊本市にある慈恵病院は、2006 年に「こうのとりのゆりかご」の設置申請を熊本市に提出し、翌年から運用を開始した。同時に、慈恵病院は予期せぬ妊娠や赤ちゃんの将来のことを、電話やメール

で相談する窓口、「SOS 赤ちゃんとお母さんの妊娠相談」の運用を開始した。

「このとりのゆりかご」は病院東側に設置され、内部に保育器が設置されており、常時適温に保たれている。扉の中には、慈恵病院からの病院の相談連絡先などが書かれた、「お母さんへの手紙」が置いてある。新生児が入れられるとアラームが鳴り、医療従事者が駆けつける。監視カメラが設置されているが、親の匿名性を守るため、子のみしか映らない。そこに預けることができるのは、生まれてから2週間以内の子どもに限られる。扉を閉めると防犯上の理由から自動ロックがかかり、入れる側からは開けられなくなる。さらに子どもを預け入れる前に相談を促すため、ゆりかごへの経路上には、親相談を呼びかける内容の案内板が設置されている。その他、プライバシーを保護するための配慮が十分になされている。

赤ちゃんが預けられた理由は、生活困窮・親の反対・未婚・不倫等である。年間約500件の相談があり、相談件数が多いのは、慈恵病院がフリーダイヤルだからであると考えられている。相談は全国から寄せられており、相談者の年代は15歳未満が2%、15～18歳が7%と、若年層の子どもたちのケースが少なくない<sup>9)</sup>。2014年に、生後間もない男児の死体が入れるとといった、想定外の事件も起きているが<sup>10)</sup>、相談件数は年々増大している。

2007年5月の運用開始から2014年までに、112人が預けられている。預けた理由は「生活困窮」と「未婚」が最も多く、東北地方から預けられたケースもあった。障害をもった子どもの割合も低くない<sup>11)</sup>。「このとりのゆりかご」を設置して見えてきた社会的課題は、性意識の低下、性行為の低年齢化、若年者の性感染症の増加と若年の人工妊娠中絶の増加、自己責任の欠如、児童虐待や高齢者虐待の増加、青少年犯罪の急増、社会的育児支援の不足、家族の絆の希薄さ等である。そのため、熊本県は国へ全国の児童家庭相談体制の充実と周知、妊娠期からの相談及び緊急体制を含む総合的な対応の整備、妊娠出産に対する経済的支援、里親制度の充実と特別養子縁組の充実及びその広報活動等、若者への生命を大切に教育の充実、学校教育における命を大切にする教育、性教育の強化等を提言した<sup>12)</sup>。

## 2. 大学生を対象としたアンケート調査

大学生を対象としたアンケートを実施することにより、若者の赤ちゃんポストに対する認識を明らかにしようとした。平成27年10月に常葉大学・富士常葉大学の保育学部と経営学部の学生に質問紙を配布しその場で記入を指示し、127名から回答を得た。学部別・男女別の回答について独立性の検定を行い、比較分析を行った。

### 1) 回答者の属性

回答者127名のうち、経営学部が34%、保育学部が66%であった。回答者全体の男女比は男性が27%、女性が73%であった。学部別の男女比は経営学部が男子72%、女子28%、保育学部は男子4%、女子94%であり、学部別の男女比に偏りがあった。

### 2) 赤ちゃんポストの認知度

回答者全体では71%が知っていると回答した。学部別に回答を比較したところ、保育学部は「知っている」の回答が80%、経営学部は52%であり、保育学部の方が高かった。男女別では、女性が77%、男性が52%であった。

独立性の検定では、 $P < 0.01$ の危険率で学部別・男女別の回答に有意な差が見られた。つまり、女性

の方が、また保育学部の学生の方が、「赤ちゃんポストを知っている」と回答した割合が高かった。これは赤ちゃんポストについての関心が女性の方が高く、保育学部の学生の方が、赤ちゃんポストについての知識と関心を持っていることの表れと考えられる。さらに保育学部に女学生の割合が高いことも起因していると考えられる。

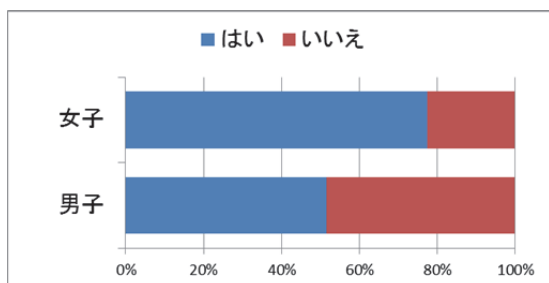


図1 赤ちゃんポストの認知度（男女別）

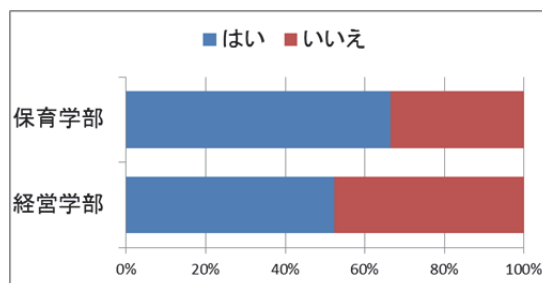


図2 赤ちゃんポストの認知度（学部別）

### 3) 赤ちゃんポストの導入の賛否

赤ちゃんポストの導入について賛成は88%、反対は12%であった。男女別では、女子の方が賛成の割合が高く、学部別では経営学部の方が高かったが、有意な差は見られなかった。毎日新聞が2007年に行った調査では、賛成が63%、反対が37%と、賛成が上回った<sup>13)</sup>が、本調査では賛成の割合がさらに高く、反対意見は1割程度となった。赤ちゃんポストの存在意義を認める意見は、学生の間では比較的高いと言える。

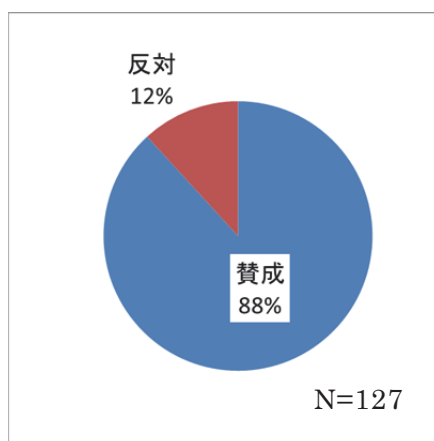


図3 赤ちゃんポストに対する賛否

### 4) 赤ちゃんポストに賛成する理由

赤ちゃんのポストの導入に賛成する者88%に、理由として考えられる項目を挙げ、「そう思う」「ややそう思う」「あまり思わない」「思わない」の4件法で回答を求めた。「そう思う」と「ややそう思う」を合わせて「思う」とし、「あまり思わない」「思わない」を合わせて「思わない」とし、結果をまとめた。最も多かったのは、「乳幼児の命を救える」で「児童遺棄や児童殺害が減る」の理由とともに「思う」の意見が9割を超えていた。「虐待が減る」「中絶が防げる」「経済的に育てられないなら仕方ない」は6割を超え、「里親に育てられた方が幸せ」でも5割を超えていた。

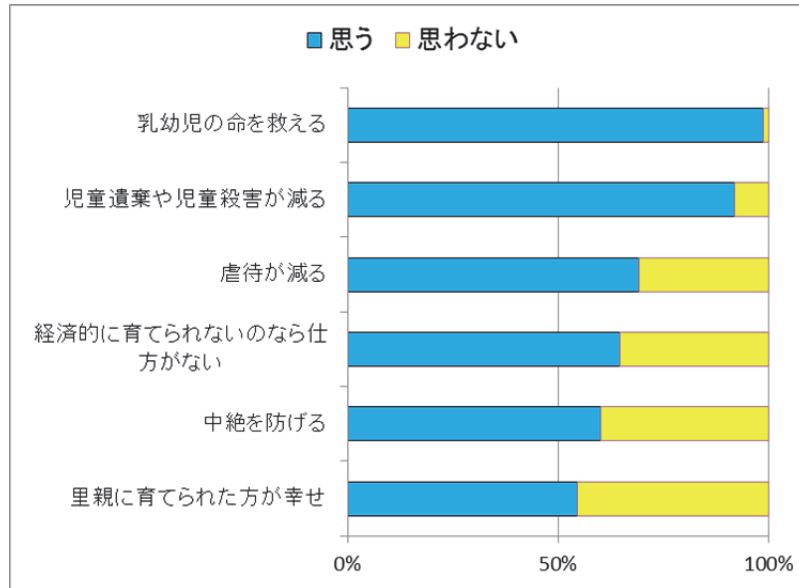


図4 赤ちゃんポストに賛成する理由

それらの理由の中で、学部別・男女別回答で有意な差があったのは、学部別の「中絶を防げる」のみであり、経営学部の学生の「思う」の回答が多く、 $P < 0.05$  の危険率で有意な差があった。保育学部の学生は赤ちゃんポストの導入により、必ずしも中絶を防げるとは思っていない。つまり赤ちゃんポストが存在するから出産に踏み切るといった単純な理由で、臨まない出産に至っているわけではないということが理解されているからと推察される。男女別では有意な差は見られなかった。

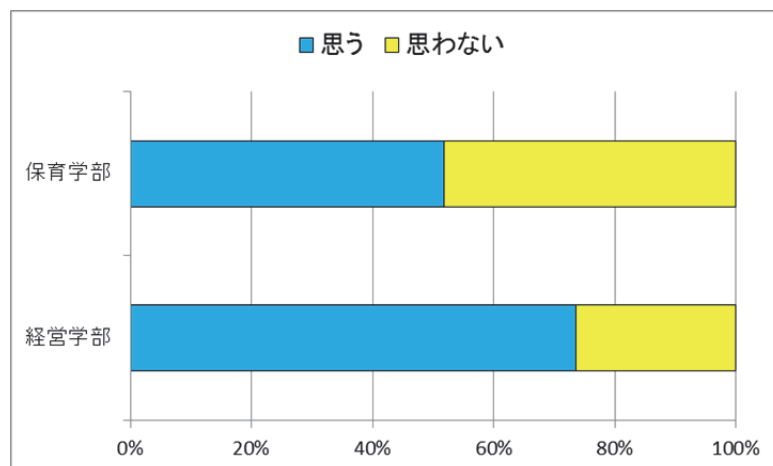


図5 中絶を防げるから（学部別）

#### 5) 赤ちゃんポストに反対の理由

赤ちゃんポストに反対する者は12%に、理由として挙げられている項目について「そう思う」「ややそう思う」「あまり思わない」「思わない」の4件法で回答を求めた。「そう思う」と「ややそう思う」を合わせて「思う」、「あまり思わない」「思わない」を合わせて「思わない」とし、結果をまとめた。

その結果、「無責任な親が増える」は、回答者すべてが「思う」と回答した。「育児放棄を助長する」は97%、「子育て支援などの他の手段で対応すべき」は92%、「保護責任遺棄罪に問われる」は72%、「十分な養育を受けられない」59%、「里親に育てられることが幸せとは限らない」49%、「赤ちゃんポストという名前が気に入らないから」28%、「性が乱れると思うから」26%の順で「思う」の回答が多かった。

賛成しない理由として、親の無責任な態度や育児放棄を懸念する理由に賛同が多く、次いで、「十分な養育を受けられない」や、「里親に育てられることが幸せと限らない」といった、子ども側の養育を懸念する理由に賛同が多かった。赤ちゃんポストという命名や性が乱れるといった意見への賛同もあった。

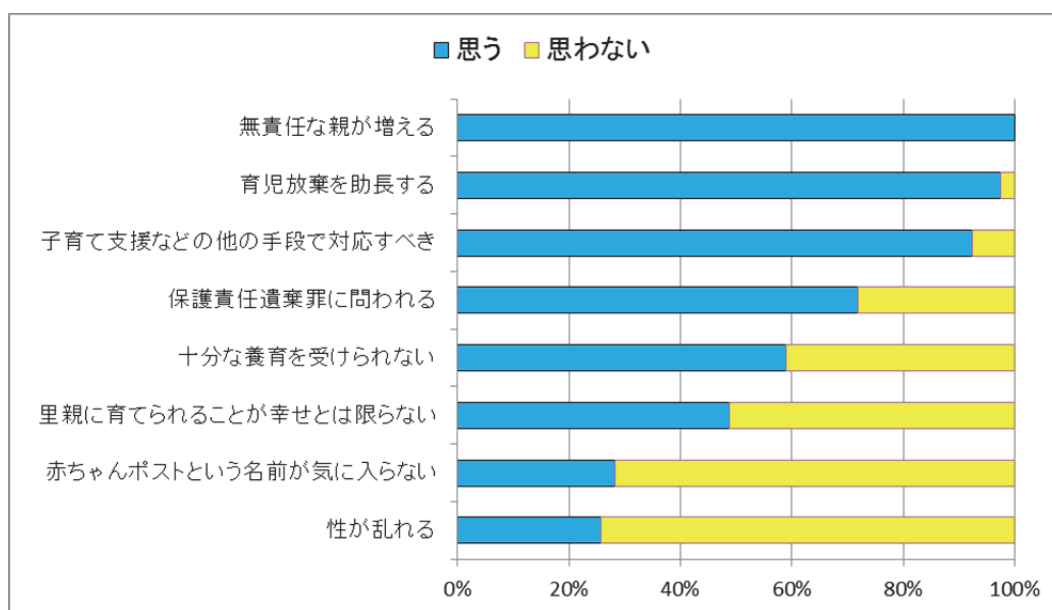


図6 赤ちゃんポストに反対する理由

反対する理由について、学部別・男女別の回答割合で独立性の検定を行ったところ、「里親に育てられる方が幸せと限らない」の項目で、学部別回答割合に有意な差があった。経営学部の学生は「思う」の意見が多いが、保育学部の学生は「思わない」の回答が多かった。保育学部の学生は社会的養護等の授業で、実親からの虐待の実態を理解しており、里親制度が児童福祉に貢献していることを理解していることが反映されていると考えられる。

また、「性が乱れる」の回答でも学部別・男女別に有意な差が見られ、保育学部の学生は赤ちゃんポストのせいで性が乱れるというイメージは少なく、男女別でも有意な差が見られ、保育学部の学生や女性の回答では学習した知識から社会的養護の実態を知っていることや、男女の性に対する意識の違いが見られたと考察される。



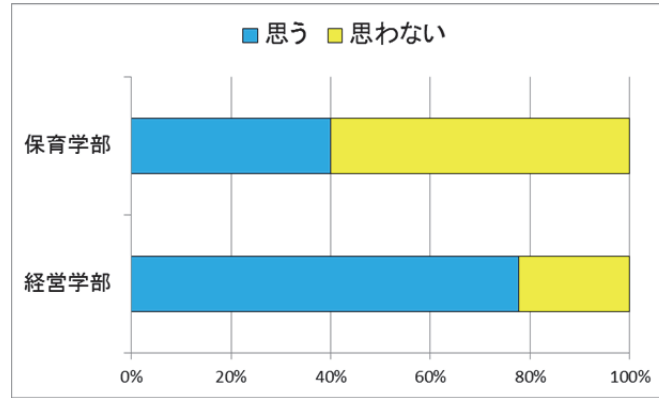


図7 里親に育てられる方が幸せに限らない（学部別）

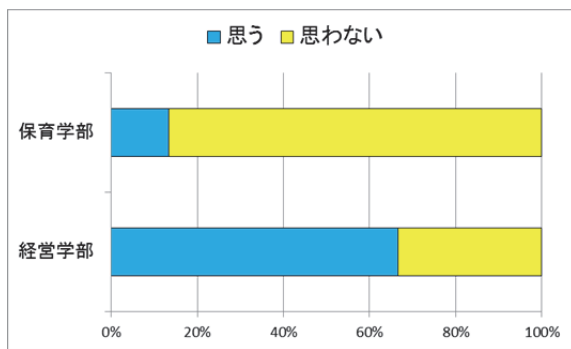


図8 性が乱れる（学部別）

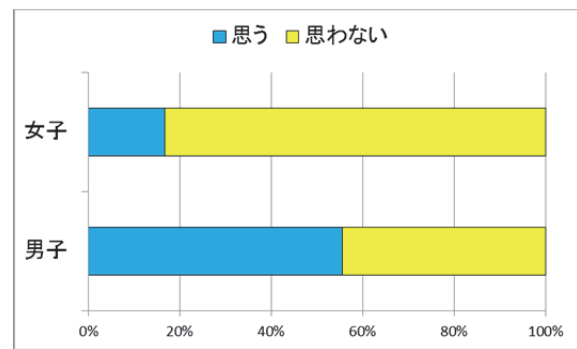


図9 性が乱れる（男女別）

#### 6) 赤ちゃんポストを増やしていくべきか

赤ちゃんポストを今後増やしていくべきかの質問に対しては、賛成が68%、反対が30%であった。前述した2007年の調査でも「増やすべき」が74%、「増やすべきでない」が6%であり<sup>14)</sup>、ほとんど同じ程度の結果となっている。

赤ちゃんポストの導入に賛成するものが88%であったことと比較すると、「増やすべき」に賛成は少なくなっている。反対も30%となっており導入に賛成しながらも増やすことには賛成できないという複雑な心理が伺われる。現在日本で運営されている赤ちゃんポストは、全国で1か所のみである。県外からの利用者も多いという現在の状況を考えると、全国に増やす必要があるという現実があるなかであっても、学生の意見はいまだ保守的なものであり、この問題の難しさが改めて認識される。

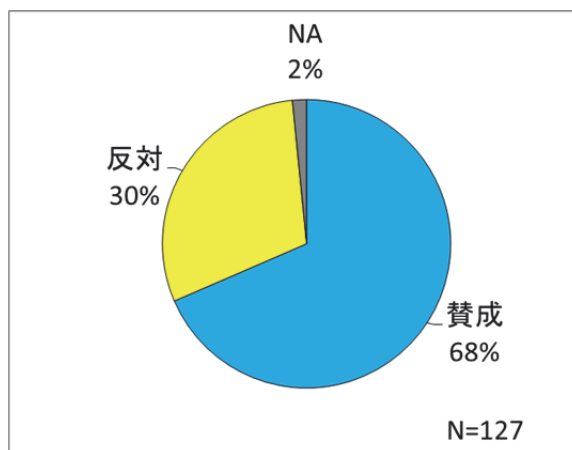


図10 赤ちゃんポストを増やすべきであるか

#### IV. まとめ

本研究では、赤ちゃんポストの歴史的背景や赤ちゃんポストに対する学生の認識を調査し、赤ちゃんポストの必要性和今後のあり方や若者への啓発の必要性について考えてきた。その結果、次のようなことが示唆された。

現在日本にある赤ちゃんポスト「こうのとりのゆりかご」は、ドイツのBabyklappeを見本にして作られた。ドイツでは、女性の救済を主眼とした多くの母子救済プロジェクトが実施されているが、「こうのとりのゆりかご」は、子どもの救済を主として設計されており、母親に対するサポートが不足してと言える。

慈恵病院に寄せられる妊娠・出産に関する相談件数は年々増加しており、県外からの電話による相談が6割を超えるという状況から、相談する機関や設備が全国的に不足していると考えられる。赤ちゃんを預けると決断する前に、相談することが大切であり、気軽に相談できるような相談機関や設備を全国的に増やしていく必要があると考えられる。

そのような状況の中、学生の調査では赤ちゃんポストを知っているものは7割であり、学部別に比較すると保育学部の学生の知っている割合が高かったことから、子育ての実態や子どもの福祉についての教育の機会が、認識を上げるのに有効であることが推察される。また男女別でも差が見られ、赤ちゃんポストへの関心には性差が見られる。

赤ちゃんポストの導入に賛成かという質問に対し、賛成が88%、反対が12%で賛成の意見が大半を占め、一般成人を対象とした調査よりも学生は賛成の割合が高く、その存在意義が若者の間で理解されていることの表れと理解される。しかし、「赤ちゃんポストを増やしていくべきか」では、反対の割合が30%へ増加しており、一般成人を対象とした調査と、ほぼ同じ割合となっている。赤ちゃんポストの導入には賛成だが、増やすことに対しては反対であるという矛盾した状況が見られる。赤ちゃんを匿名で預けるといふ施設には抵抗を感じるが、そのような状況が増えてはならないという感情があるのかもしれない。

反対する理由から回答の多い意見を見ると、「無責任な親が増える」、「子育て支援などの他の手段で対応すべき」、「育児放棄を助長する」であった。赤ちゃんポストが増えることで、無責任な性交渉によ



る妊娠が増え、育児放棄を容認する考えの人が増えることが危惧されている。反対に、赤ちゃんポストを増やすことに賛成の意見を見てみると、「乳幼児の命を救える」、「児童遺棄や児童殺害が減る」、「虐待が減る」という順に、赤ちゃんポストを増やすことで、児童遺棄・殺害・虐待が減ると考えていることがわかった。近年子どもに関する事件が増加し、メディアに取り上げられる機会が多くなり、赤ちゃんポストの存在意義への理解が高まっていると考えられる。

回答結果を学部別に比較した時、保育学部の学生の方が赤ちゃんポストや子どもをめぐる問題についての理解が深いという結果となり、子どもと女性をめぐる状況についての教育の効果が実感される。男女別では「赤ちゃんポストを知っているか」の質問に対して、女子の方が認知度は高く、女性は妊娠や出産などに関する問題に関心があり、望まない妊娠や児童虐待を身近なものとして認識している可能性があると考えられる。

以上のように赤ちゃんポストに対する学生の認識が明らかとなったが、赤ちゃんポストは追い詰められた母親の最終手段として、なくてはならない存在であることは否定できない。しかし、増やすことに反対する意見の背景には、赤ちゃんを捨てるかと決断する前の母親を救済すべきという考えがあると理解される。そのための相談機関や設備を増やすことが急務であると考えられる。望まない妊娠・子育て不安・子どもの障害等、まずは相談し、相談者を孤立させないことが重要であり、そのような現実には社会が直視する必要があると思われる。

保育学部の学生は、保育現場で女性の相談や援助を行う、最も身近な存在になり得る人材であると言える。全ての人々が赤ちゃんポストの問題を認識し、子どもを産み育てることの重大さを自分の問題として考えていくために、保育者の支援は貴重な役割を果たすと考えられる。赤ちゃんポストに代表される、目を向けにくい社会的課題について、考える機会を増やす教育が今後も必要とされており、保育者養成教育の中でも重視されるべきであると考えられる。

## 引用文献

1) ニュースサイトで読む, 毎日新聞:

(<http://mainichi.jp/articles/20161026/ddl/k43/100/301000c#csidx8d9b217b0e147678eefa8a87391cd01>, 2016, 10.26)

2) 柏木恭典「「赤ちゃんポスト」とコミュニティ: 欧州における Babyklappe の地平と実際」『人文科学』13, 2008, p.145

3) 前掲2), 151-153

4) 柏木恭典「ドイツにおける「赤ちゃんポスト」の地平」『千葉経済大学短期大学部研究紀要』7, 2011, pp.43-52

5) News sphere, (<http://newsphere.jp/world-report/20131218-3/>, 2015年9月)

6) WEBRONZA ニュース

(<http://webronza.asahi.com/global/articles/2913112200001.html>, 2016年11月20日)

7) 阪本恭子「その後の「赤ちゃんポスト」- 未来の母と子の福祉のために -」『医療・生命と倫理・社会』8, 2009, p.32

8) 柏木恭典「シュテルニパルクの子育て支援と赤ちゃんポスト: ドイツにおける匿名の母子支援プロジェクト (第1部 <特集論文> 子育て支援)」『保育学研究』52(3), 2014, pp.391-401

9) 慈恵病院「こうのとりのゆりかご」

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%B5%A4%E3%81%A1%E3%82%83%E3%82%93%E3%83%9D%E3%82%B9%E3%83%88>,2016.11.20)

10) ニュース速報 (japan,<http://breaking-news.jp/2014/10/04/012626>,2015.12.15)

11) 日本経済新聞

([http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG20H1I\\_Q5A520C1CC0000/](http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG20H1I_Q5A520C1CC0000/),2016.11.20)

12) 田尻由貴子・綿引伴子「講演会・対談「こうのとりのゆりかご」が問いかけたもの：家庭科教育への期待（日本家庭科教育学会第54回大会報告）」『日本家庭科教育学会誌』54(4), 2012, 267-270

13) NTT コムリサーチ：[\(http://research.nttcoms.com/database/data/000493/](http://research.nttcoms.com/database/data/000493/),2016.11.20)

14) 前掲 13)